

## 第三者意見



サンメッセ総合研究所(Sinc)所長／  
首席研究員  
サンメッセ株式会社 シニア・アドバイザー  
株式会社ニッセイ基礎研究所 客員研究員

川村 雅彦 氏

### CSR報告の構成：報告範囲のグローバル化を

今年度のCSR報告書を読んでまず気付くことは、昨年度と比べ頁数が倍増していることですが、巻末「データ集」に加え、ESGの領域別に取組が報告され、内容も充実しました。

特に「グローリーのCSR重要課題」では、マテリアリティマップの掲載で重要度の濃淡が分かり、各事項の目標と実績や課題も明確になりました。しかし、これは単年度の発想ゆえ、今後は中長期計画(2020中期経営計画や長期ビジョン2028)との連携が必要です。

また「バリューチェーンにおけるCSRの主な取り組み」でもステークホルダーごとの数値実績が記載され、分かり易い図表となっています。ただ、後述するSDGsとも関連しますが、「環境影響」と同様に、バリューチェーンの各段階における社会的影響(プラス・マイナスのインパクト)を明確にすると、自社のCSR課題がより鮮明になります。

日本とアジアで開発・製造や調達、世界で広く販売・保守を展開し、海外売上高比率も4割を超す貴社は、もはやグローバル企業と言うことができます。しかし、記載内容は国内中心であるため、情報開示もグローバル化することが求められます。そこで「CSR委員会」をグローバル化し、各国にもCSR担当を設置することをお勧めします。さらに、各国での社会貢献活動を超えたCSR経営の報告も必要となります。

### 第三者意見を受けて

川村様には、当社グループのCSRに対する貴重なご助言をいただき、誠にありがとうございます。

現在、当社グループは、『2020中期経営計画』の達成に向け、全社一丸となって取り組んでおります。お客さまとの強固な信頼関係を大切にしながら、これまで培ってきたコア技術や先進的な技術を活用し、今後ますます複雑化する社会課題の解決に向けた新しいソリューションを提供することで、新たな「信頼」の創造を目指してまいります。

今回ご指摘いただきましたグローバルな視点でのCSRの取り組みについては、次期中期経営計画の策定に向けた我々の大きな課題として捉えております。今後は、長期ビジョンである「人と社会の『新たな信頼』を創造するリーディングカンパニーへ」の実現に向けた取り組みを推進するとともに、グループ全体でのCSR経営のさらなる推進に努めてまいります。

### CSR報告の内容：戦略的なCSR経営への転換を

環境領域の取組と開示は進んでいますが、操業時のKPIが「エネルギー消費量従業者原単位」では、CO<sub>2</sub>排出総量の削減を求めるパリ協定やSDGsに貢献しているとは言えません。他方、製品開発では全体の大半を占めるスコープ3の製品使用時の排出量を、長期目標の2030年に2005年比30%削減とされたことは評価できます。これはKPIに相当します。

環境教育については、「G-エコ製品」に直結する設計者に対する環境配慮設計の研修、常駐する調達先の従業員も対象としていることが評価できます。なお、環境のマイナス情報の有無を記載していることに、運用管理の徹底と報告の誠実さを感じます。

社会領域ではサプライチェーン・マネジメントとして、国内で「CSR自主点検チェックリスト」によるCSR調達を推進されていますが、今後は海外展開が必要です。人材ダイバーシティの取組は国内の女性、障がい者、シニアが中心ですが、外国人はいかがでしょうか。海外の製造・販売・保守における人的側面も記載ありません。

SDGsについては、アイコンの貼り付けだけでは取組領域が同じと言っているに過ぎません。大事なことは2030年のSDGs達成への貢献であり、ターゲットレベルでどのような目標を立て実践しているかを記載すべきです。SDGコンパスで提唱されたバリューチェーン・マッピングにより、自社の課題が抽出できます。

創業から100年を経た今日、21世紀の持続可能な社会の実現に向けて、メガトレンドを踏まえた長期戦略の観点から、自社の「ありたい姿」を考えるCSR経営への転換に期待します。



グローリー株式会社  
上席執行役員

道下 政司